

日本の文学

北原白秋

嘉村光太郎

萩原朔太郎



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

17

北原白秋
高村光太郎
萩原朔太郎

日本の文学 17

©1965

北原白秋
高村光太郎
萩原朔太郎

昭和40年4月5日初版発行
昭和40年4月6日再版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 中央精版印刷株式会社製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

北原白秋

邪宗門

思ひ出

東京景物詩及其他

畑の祭

真珠抄

白金之独楽

水墨集

海豹と雲

141 125 119 113 108 85 30 7

牡丹の木	黒　檜	溪流唱・椽	夢　殿	白南風	海　阪	風隠集	雀の卵	雲母集	桐の花
------	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

197	192	191	189	185	182	180	174	170	156
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

高村光太郎

道程

智恵子抄

典型

短歌

萩原朔太郎

月に吠える

定本青猫

純情小曲集

氷島

散文詩

459	445	429	382	323	318	291	269	201
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

注解

解説

年譜

口絵

挿画

伊藤 整

521 492 479 469

「雀の卵」

北原白秋

「邪宗門」

石井柏亭

「邪宗門」

太田正雄

「思ひ出」「白金之独楽」「桐の花」「雲母集」「雀の卵」

北原白秋

「思ひ出」

司馬江漢

「東京景物詩」

木下杢太郎

「月に吠える」

田中恭吉

「月に吠える」

恩地孝四郎

「定本青猫」

「世界名所図絵」より

北原白秋

ここには、白秋の処女詩集から没後に刊行された歌集にいたるまでの詩集・歌集から、おのおのについてその代表的作品を選んで収録した。

邪宗門



父上に献ぐ

父上、父上ははじめ望み給はざりしかども、
児は遂にその生れたところにあこがれて、
わかき日をかくは歌ひつづけ候ひぬ。もはや
もはや咎め給はざるべし。

邪宗門扉銘

ここ過ぎて曲節の悩みのむれに、
ここ過ぎて官能の愉楽のそのに、
ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず。
かの筆にも言語にも言ひ尽し難き情趣の限なき振
動のうちに幽かなる心靈の歎歎をたづね、縹渺た
る音楽の愉楽に憧がれて自己観想の悲哀に誇る、
これわが象徴の本旨に非ずや。されば我らは神秘
を尚び、夢幻を歎び、そが腐爛したる頽唐の紅を
慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寐にも忘れ
難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。
暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィ
ンクスの瞳也。あるはまた落日のなかに笑へるロ
マンチッシェの音楽と幼児磔殺の前後に起る心状
の悲しき叫也。かの黄蠟の腐れたる絶間なき痙攣
と、ギオロン^{ギョロン}の三の絃を擦る嗅覚と、曇硝子にう
ち噎ぶウキスキイの鋭き神経と、人間の脳髓の色
したる毒艸の匂深きためいきと、官能の魔睡の中
に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることながら、仄かな
る角笛の音に逃れ入る緋の天鵝絨の手触の棄て難
さよ。

例言

一、本集に収めたる六章約百二十篇の詩は明治三

十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、すなわち最近三年間の所作にして、集中の大半はほとんど昨一年の努力に成る。就中「古酒」中の「よひやみ」「柑子」「晚秋」の類最も旧くして「魔睡」中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新しきものなり。

一、予が真に詩を知り初めたるは僅かにこの二三年のことに属す。さればこの間の前後に作られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の試作たるを免れず。従つて本集の編纂に際しては特に自信ある代表作のみを精査し、少年時の長篇五六及びその後の新旧作七十篇の余は遺憾なく割愛したり。この外百篇に近き「断章」と「思出」五十篇の著作あれども、紙数の制限上、これらは他の新しき機会を待ちて出版するの已むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諧楽と感覚の印象とを主とす。故に、すべて予が抛るところは僅かなれども生れて享け得たる自己の感覚と、刺戟苦き神経の悦楽とにして、かの初めより情感の妙なる震慄を無みしただ冷かなる思想の概念を求めて強いて詩を作為するがごときを嫌

忌す。されば予が詩を読まんとする人にして、これに理知の闡明を尋ね、幻想なき思想の骨格を求めんとするは謬れり。要するに予が最近の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズムを感じ、そのままの調律に奏でいんとする音楽的象徴をもつばらとするが故に、それが表白の方法においてもおおむねかの新しき自由詩の形式を用いたり。

一、或人のごときはかくのごとき詩を嗤いて甚しき誇張と云い、架空なる空想を歌うものと做せども、予が幻覚には自ら真に感じたる官能の根柢あり。かつ、人の天分にはそれぞれ自らなる相違あり、強いて自己の感覚を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本来、詩は論うべききわのものにはあらず。かつて幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の単に創作にのみ執して、一語もこれに答うところなかりしはいささか自己の所信に安んじたればなり。

一、終に、現時の予は文芸上のいかなる結社にも与らず、また、いかなる党派の力をも恃むところなきことを明にす。要はただこれらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が独自なる個性



昔よりいまに渡り来る黒船縁がつく
れば鯨の餌となる。サンタマリア。

「長崎ぶり」

の印象に奔放なるべく、自由ならんことを欲するものなり。

一、なお、本集を世に公にすることを得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村両氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月

著者識

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、

色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蛮の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酤の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖礫、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火点るといふ。

かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしほり、
腐れたる石の油に画くてふ麻利耶の像よ、
はた羅甸、波爾杜瓦爾の横つづり青なる仮名は
美しくき、さいへ悲しき歓楽の音にかも満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、
百年を刹那に縮め、血の礫育にし死すとも
惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢、
善主磨、今日を祈に身も霊も薫りこがるる。

室内庭園

晩春の室の内、
暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……
そのもとにあまりりす赤くほのめき、
やはらかにちらほるへりオトロオプ。
わかき日のなまめきのそのほめき静こころなし。

尽きせざる噴水よ……



黄なる実の熟るる草、奇異の香木
その空にはるかなる硝子の青み、
外光のそのなごり、鳴ける鶯、
わかき日の薄暮のそのしらべ静こころなし。

いま、黒き天鹅絨の
にほひ、ゆめ、その感触……噴水に縫れたゆたひ、
うち湿る草の函、籠ゆる褐色
その空に暮れもかかる空氣の吐息……
わかき日のその夢の香の腐蝕、静こころなし。

三層の隅か、さは
腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……
ものなべて悩ましさ、盲目し少女の
あたたかに匂ふかき感覚のゆめ、
わかき日のその露に音は響く、静こころなし。

晩春の室の内、
暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……
そのもとにあまりりす赤くほのめき、
甘く、またちらほひぬ、ヘリオトロオプ。
わかき日は暮るれども夢はなほ静こころなし。

陰影の瞳

夕となればかの思、曇硝子をぬけいでて、
廃れし園のなほ甘きときめきの香に顫へつつ、
はや億え萎ゆる芙蓉花の腐れの紅きものかげと、
縫れてやまぬ秦皮の陰影にこそひそみしか。

如何に呼べども静まらぬ瞳に絶えず涙して、
帰るともせず、密やかに、はた、果しなく見入りぬる。
そこともわかぬ森かげの鬱憂の薄闇に、
ほのかにのこる噴水の青きひとすぢ……

WHISKY.

夕暮のものあかき空、
その空に百舌啼きしきる。
Whiskyの饅頭の列
冷やかに拭く少女、
見よ、あかき夕暮の空、
その空に百舌啼きしきる。

赤き花の魔睡^{*}

日は真昼^{まひる}、ものあたたかに光素^{ホステル}の
波動^{はどう}は甘く、また、緩る^{ゆる}く、戸に照りかへす、
その濁^{にご}る硝子^{しょうし}のなかに音もなく、
啾囉^{しゅうら}仿謨^{はんま}の香ぞ滴^たる……毒の謠言^{うはごと}……

遠くきく、電車のきしり……
……棄^すてられし水薬^{すいやく}のゆめ……

やはらかき猫の柔毛^{にげ}と、黠^{あなうら}の
ふくらのしろみ悩ましく過ぎゆく時よ。
窓^との下、生の痛苦^{せいにつく}に只赤く戦^{たた}ぎえたてぬ草の花
亜鉛^{とたん}の管^{くだ}の
湿りたる笥^{かげひ}のすそに……いまし魔睡^{ますい}す……

空に真赤な

空^{まつか}に真赤な雲のいろ。
玻璃^{はり}に真赤な酒の色。

なんでこの身が悲しかる。
空に真赤な雲のいろ。

接吻の時

薄暮^{くれがた}か、
日のあさあけか、
昼か、はた、
ゆめの夜半^{よは}にか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩暈^{めぐるめき}、
赤き震慄^{おび}の接吻^{くちく}にひたと身顛^{みひざ}ふ一刹那^{いっせな}。

あな、見よ、青き大月^{たいげつ}は西よりのぼり、
あなや、また瘡病^{さうびや}む終の顛^{さる}して
東へ落つる日の光、
大ぞらに星はなげかひ、
青く盲^{めし}ひし水面^{みづ}には薬香^{くすりか}にほふ。

あはれ、また、わが立つ野辺^{のべ}の草は皆色も干乾^{ひから}び、
折り伏せる人の骸^{かね}の夜のうめき、
人霊色^{ひとたまいろ}の

色赤きいんくの纒びんのかたちして

『豊国』のぼやけし似顔生ぬるく、

曇硝子の窓のそと外光なやむ。

ものの本、あるはちらほふ日のなげき、

暮れもなやめる 霊の金字のにほひ。

くちつけ
接吻の長き甘さに倦あきぬらむ。

そと手をほどき靄の内さぐる心地に、

病めるペリガンいま遠き湿地になげく。

五、
六、
七、
八、
九、

かかるとき、おぼめき^{なす}摩る Violon^{ヴァイオリン}の

なやみの絃の手触のほひの重さ。

おとす
澱み^す餼えつつ……血のごともらんぷは消ゆる。

窓

かかる窓ありとも知らず、昨日まで過ぎし河岸。
今日は見よ、